J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 14, No. 1 (2009) 125～130

万葉集3223番歌の「日香天之」の解釈について

竹生　政資[1]，西　　晃央[2]

An Interpretation of the Second Phrase of the 3223rd Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU，Akihiro NISHI

要　　旨

万葉集3223番歌の出だしは「かむとけの 日香天之」となっている。発句の「かむとけ」は「落雷」を意味するが、第二句の「日香天之」は訓みも意味もまだ確定していない。これまでに試みられた「日香天之」の訓みは注釈書によりさまざまで、「日」や「香」を誤字と見なして「はたたく空の」や「曇れる空の」と訓んだり、原文のままで「光れる空の」や「ひかをる空の」と訓んだりしているが、いずれもまだ定説となるには至っていない。

本論文では第二句の「日香天之」を原文のままで「ひかく空の」と訓み、歌の最初の二句を「かむとけの ひかく空の」と訓んでその意味を「落雷が引っ掻く空の」と解する提案を行う。「ひかく」という語は近世以降に促音便として登場する「ひっかく（引っ掻く）」と同じものである。促音便は漢字表記できないから上代の「文献」史料には残っていないけれども、万葉時代に「話し言葉」として促音便が存在したと思われる痕跡はいくつかあり、その一つが3223番歌の「日香（ひかく）」という表記である。おそらく歌を漢字で表記する際に「ひっかく＝引っ掻く」の促音「っ」が表記できないため、促音を省略して「日香（ひかく）」と表記したのであろう。

1．はじめに

この論文で取り上げる万葉集3223番歌は、巻十三の「雑歌」と題する27首（3221番歌から3247番歌まで）のうち第三番目の長歌である。この論文の目的は、未だ定訓のない万葉集3223番歌の第二句「日香天之」について新しい訓みと解釈を示すことである。そのためにまず、3223番歌の訓読文と原文を新日本古典文学大系本にしたがって掲載する（[1]、pp. 154-158）。ただし、第二句の最初の二文字「日香」はまだ訓みが定まっていないので底本原文のままとした。第二句には下線を引き、この歌に添えられた反歌（一首）は以下の考察にとって必要ないので省略した。

13/3223　かむとけの　日香空(そら)の　九月の　しぐれの降れば　雁がねも　いまだ来鳴かぬ　神奈備の　清

[1] 佐賀大学　医学部　地域医療科学教育研究センター（takefu@cc.saga-u.ac.jp）
[2] 佐賀大学　文化教育学部　理数教育講座（nishia@cc.saga-u.ac.jp）

き御田屋の　垣内田の　池の堤の　百足らず　斎槻の枝に　みづ枝さす　秋のもみち葉　まき持てる　小鈴もゆらに　たわやめに　我はあれども　引き攀ぢて　枝もとををに　ふさ手折り　我は持ちて行く　君がかざしに

【原文】霹靂之　日香天之　九月乃　鍾礼乃落者　鴈音文　未来鳴　甘南備乃　清三田屋乃　垣津田乃　池之堤之　百不足　五十槻枝丹　水枝指　秋赤葉　真割持　小鈴文由良尓　手弱女尓　吾者有友　引攀而　条文十遠仁　捄手折　吾者持而往　公之頭刺荷

次に、この歌の第二句「日香天之」に関する先行研究を見るために、これまでに出版された代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈（第二句に関する部分だけ）を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更した。

①新日本古典文学大系[1]

【訓読と現代語訳】「はたたく空の」と訓み、「(大雷の）鳴り轟く空の」と現代語訳。

【注釈】第二句原文の始めの二字、諸本「日香」、天治本「白香」。訓義未定。漢語「阿香」の誤字と見なして、ハタタクと訓んでおく。「はたたく」は雷鳴する意の四段動詞。「霜月師走の降りこほり、水無月の照りはたたくにも障らず来たり」(竹取物語)。「阿香」は雷の別称。雷車を押す女（「続搜神記」・芸文類聚・雷）

②新編日本古典文学全集[2]

【訓読と現代語訳】読み方不明のため訓読と解釈を保留。

【注釈】原文のまま。読み方不明。

③講談社文庫（中西進）[3]

【訓読と現代語訳】「光れる空の」と訓み、「(稲妻が）空に走り」と現代語訳。

【注釈】訓に疑問がある。底本の古訓ヒカルミソラノほかがある。

④萬葉集註釈（澤瀉久孝）[4]

【訓読と現代語訳】「ひかをる空の」と訓み、「日の雲つてゐる空の」と現代語訳。

【注釈】原文「日香天之」を西（朱）以下ヒカルミソラノとし、考にはヒカヲルソラノとし、「くもるをかをるといふは、神代紀に、唯有朝霧而薫満之哉（タヾアサキリノミカヲリミテルカモ）、てふを始ていと多し」と云つた。「潮気のみ　かをれる国に」(二・一六二）参照。古典大系本には「香」は「杳」の誤として、「日杳ヒクラシの意をとつて曇れると訓む」とした。「杳」を「香」に誤つたと見る事は「吉」を「告」に誤る例（一・一）にも似て認めやすいやうであるが、「香」のまゝでカヲルと訓んで、日の曇る空と解く事が出来るとすればしひて誤字と考へるには及ばないと思ふ。

⑤日本古典文学大系[5]

【訓読と現代語訳】「曇れる空の」と訓み、「(雷が）鳴って曇っている空の」と現代語訳。

【注釈】曇っている空。底本、日香天。香は杳の誤とみる。日香ヒクラシの意をとって曇れると訓む。

「日香天之」の訓みと意味について検討する前に、まず上にあげた五つの先行研究の問題点についてまとめておこう。①と⑤はいずれも誤字説をとっているが、第二句には写本の異同がなくほとんどすべて「日香天之」で一致しており、この中に誤字が含まれる可能性はかなり小さい。したがって誤字説による問題解決には疑問が残る。そのほかにも①と⑤の誤字説には以下の問題がある。①は「日」を「阿」の誤字とするが、この二つの字はそれほど似ていない点が問題である。一方、⑤は「香」を「杳」の誤字とする。「香」と「杳」は確かに非常によく似ているが、万葉集には「香」の用例が322件（当該歌も含む）あるのに対して「杳」は一つもない。この点に疑問がある。

次に③は誤字説によらず「日香」を原文のままで「ひかれる＝光れる」と訓んでいるが、万葉集の322例の「香」のうち「かれる」と訓む例は一つもない。また、もし「日香」を「光れる」と訓むのであれば「光」の字を用いるのが自然であるのに、なぜわざわざ「日香」と表記したのだろうか、その動機が理解できない。ちなみに万葉集には「光」が42例あり、「ひかる」や「てる」（活用形や使役形を含む）と訓ませている。ほかに「光儀」で「すがた」と訓ませている例もある。

一方、④は「日香」を原文のままで「ひかをる」と訓んでいる。しかし意味があいまいである上に、万葉集中に「ひかをる」という例はほかになく、またほかの上代文献にも登場しない。たとえ「ひかをる」という訓みを認めたとしても、それがどうして「日の曇る」という意味になるのだろうか。なぜ「曇る」という意味が「香」の字によって表記されたのだろうか。「時代別国語大辞典 上代編」によると「かをる」という語には「煙・湯気・霧などが立ちこめる」と「香気を放つ、においがあたりに立ちこめる」の二つの意味があるが（[6]、p. 235）、おそらくここでは「ひかをる」の「かをる」を前者の意味に解したものと思われる。しかし、「かをる」の主語は「日」であり、「日」は太陽であるから、「ひかをる」は「太陽があたりに立ちこめる」と解するほかなく、「日が曇る」という意味に解するには無理がある。また「ひかをる」と発句の「かむとけの（落雷の）」とがうまくつながらないのも問題である。

2.「日香天之」の訓みと解釈

前節でも指摘したように、3223番歌の第二句「日香天之」に関する先行研究にはいずれも問題点があることがわかった。本論文では「日香天之」の訓みを再検討するにあたり、この句の原文に異同がなく誤字が含まれる可能性が小さいことから、誤字説を避け、万葉集に用例のある標準的な訓み方のみを採用することにする。

従来もっとも困難とされてきたのは第二句の最初の三文字「日香天」をどのように訓むかである。そこでまず万葉集中で「日」、「香」、「天」の字がどのように訓まれているかについて調べることから始めよう。まず「日」について調べた結果を示す。全部で637件あり内訳は次のとおりである。

①「ひ」または「び」
②「か」または「が」
③「ひる」
④「いふ（言ふ）」の活用形
⑤「一昨日（をとつひ）」、「昨日（きのふ）」、「今日（けふ）」、「明日（あす）」、「春日（かすが）」、「比日（このころ）」、「日本（やまと）」、「終日（ひねもす）」などの慣用表現。

このうち最も用例が多いのは①の「ひ」（または「び」）で全体の半数以上（348件）を占めている。

次に万葉集に322例ある「香」の訓みについて調べてみると、以下の四つに分類することができる（丸カッ

コ内の数字は歌番号)。ただし446番歌の「天木香樹」と2488番歌の「廻香樹」は義訓表記として「むろの木」と訓まれているが、これらは例外的な訓み方であるので以下の分類には含めない。

⑥「か」　　例.「明日香風（あすか風)」(51)
⑦「かぐ（はし)」　　例.「香山尓（かぐ山に)」(2449)、「香吉（かぐはしき)」(4169)
⑧「かう」　　例.「香塗流（かう塗れる)」(3828)
⑨「にほふ、にほゆ」　例.「香君之（にほへる君が)」(443)、「香未通女（にほえをとめ)」(3305)

同様に、「天」の訓み方について調べた結果を示す（丸カッコ内の数字は歌番号)。

⑩「て」
⑪「あめ」または「あま」
⑫「そら」　　例.「天尓満（そらにみつ)」(29)
⑬「天皇（おほきみ、すめろき、すめら)」、「天木香樹（むろの木)」

以上に示した結果は「日」、「香」、「天」の訓みに関する万葉集の確例である。したがって、3223番歌の「日香天」の訓みを考える場合、まず上にあげた訓みの組み合わせとして訓むことから始めるべきであろう。ちなみに「日香天」の三字のうち「天」についてはほとんどの注釈書が「そら＝空」と訓んでおり、万葉集にも「そら」と訓んだ確例があること（上の⑫)、さらに歌の文脈からも「そら」と訓むのが適切だと思われる。したがって残された問題は「日」と「香」の二文字をどう訓むかという点にしぼられる。

さて、「日」の訓みは上に示した①から④のいずれかであり、「香」は⑥から⑨のいずれかである。この条件の下ですべての組み合わせを考えてみると、「日香天之＝日香空の」の訓みとして可能性がありそうなのは①と⑦の組み合わせによる「ひかく空の」という訓みだけである。万葉集では「香」は「かぐ」と訓まれ「ぐ」は濁音のみであるが（上の⑦)、日本書紀には「香菓」に「かくのみ」という訓が付けられていることから「香」は「かく」と清音でも訓まれたことがわかる（[6]、pp. 180-181)。ここでは「香」の訓みとして清音の「かく」をとる。なお「日香天之」は歌の第二句であるから本来七音として訓まれるべき句であるが、もし「ひかく空の」と訓むと六音の「字足らず」となる。この問題については後で考える。

もし「日香天之」を「ひかく空の」と訓んだ場合、どのような意味が考えられるだろうか。文脈から推測すると「ひかく」は「ひき（引き）＋かく（掻く)」という複合動詞「ひきかく」が「変化」したものだと考えられる。「変化」の詳細については後で議論するが、おそらく当時の口語で「ひきかく」が「ひっかく」と促音便で発音され、これを漢字表記する際に促音「っ」が表記ができないため「ひかく」と表記されたものと思われる。上代特殊仮名遣の観点からも「ひ（日)」は甲類であり、「ひき（引き)」の「ひ」も甲類でありつじつまが合う。もしこのような訓みを認めたとすると、3223番歌の発句と第二句は「かむとけの　ひかく空の」となるが、この意味は「落雷が引っ掻く空の」となり、落雷は恐ろしい稲妻と轟音を伴いあたかも空を引き裂くような強烈な自然現象であるから、落雷が「空を引っ掻く」という表現は実際の落雷の様子をきわめて適確に描写した表現だと言える。

このように「日香天之」を「ひかく空の」と訓み「(落雷が) 引っ掻く空の」という意味に解すれば、訓みの問題が解決するだけでなく意味も文脈にぴったり合う。また本来七音となるべき句が「ひかく空の」と六音で表現されている理由についても、「ひっかく」の促音「っ」が省略されていると考えれば実質的には七音であり「字足らず」の問題も解決する。しかし、このような考え方が説得力をもつためには、似た

ような上代語の例がほかにも存在する必要がある。実は、以下に示すように「ひさぐ」という上代語の例が存在するのである。

そのことを示す前に、まず上代における「ひき（引き）＋かく（掻く）＝ひきかく」という複合動詞の存在について確認しておく必要がある。「ひきかく」という語は万葉集には登場しない。また「時代別国語大辞典 上代編」にも「岩波古語辞典」にも「ひきかく」あるいは「ひっかく」という語は掲載されていない。このことは上代から近世始め頃まで「ひきかく」あるいは「ひっかく」という語は少なくとも「文献上」は存在しなかったことを意味する。ところが「ひく（引く）」という動詞は万葉集をはじめ古事記・日本書紀などの上代文献に多数用いられており、また「かく（掻く）」という動詞についても同様である。だとすれば、この二つの語を組み合わせた「ひきかく」という複合動詞が上代はもとより近世初頭まで存在しなかったというのはきわめて不可解なことだと言わなければならない。「ひっかく」という語は江戸時代の万治年間（1658—1661年）に成立したとされる「東海道名所記」には「かゆくは、ひっかくべいよ」として登場しているところを見ると（小学館の国語大辞典）、この語は少なくとも江戸時代初期以降には「ひっかく」という促音便の形で用いられ、現代語でも日常的に頻繁に用いられている。「ひっかく」という語は必須の日常語であり、この語が上代に存在しなかったなど想像さえできない。したがって「ひきかく」あるいは「ひっかく」という語が文献に見えないからといってその語が上代に存在しなかったと考えるべきではなく、おそらく当時の「話し言葉」では「ひっかく」と促音便で発音されていたが、促音「っ」を漢字表記することができないため万葉集などの「文献」には登場することがなかったというのが真相であろう。たまたま万葉集3223番歌の作者が「ひっかく」という口語の促音「っ」を落として「ひかく（日香）」と表記してくれたおかげで、上代の促音便の「痕跡」が残る結果となった。すなわち、「ひっかく」という語は当時の「口語」としては存在していたが文字として表記する術がなかったために「文献上」は残らなかったと考えたい。

このような考えを裏付ける根拠がある。それは「ひっ提げる」という意味の上代語「ひさぐ」が文献に存在し、この語が「ひっさぐ」という促音便の痕跡を残していることである。このことについて「時代別国語大辞典 上代編」は次のように記している（[6]、p. 609）。

> ひさぐ〔提〕（動下二）手にさげる。ひっさげる。ヒキ＝サグの約であろう。「提（ひさげ）是十握剣平天下矣」（仲哀紀八年）「各提（ひさげ）布一端、乗船還去」（斉明紀六年）「己がや愛子夫（イトコセ）の門に調度を比佐介（ひさげ）て」（風俗ちちらら）「提ヒサグ」（名義抄）

ここでは「ひさぐ」が「ひき（引き）＋さぐ（提ぐ）＝ひきさぐ」からの「約（縮約）」として説明されている。しかし実際には縮約というよりも、口語で「ひっさぐ」と発音されていたものが促音「っ」が表記できないために促音が省略され「ひさぐ」と表記されたのであろう。というのは、「ひっさげ」という促音便が「岩波古語辞典」に掲載されていること（[7]、p. 1120）、「時代別国語大辞典 上代編」に「ひさぐ」が掲載されていること、この二つの事実に基づいて考える時、もし上代に「ひきさぐ」から縮約した「ひさぐ」という語が人々に広く用いられていたのであれば、どうして中世以降になって「ひさぐ」から新たに「ひっさぐ」という促音便形が生じたのだろうか。縮約説ではこの現象がうまく説明できないのである。音韻変化は「発音の省力化」の方向に起こるのが自然だからである。したがって、上代語における「ひさぐ」という語の存在は、「ひきさぐ」が縮約を起こして「ひさぐ」に変化したと考えるよりは、上代においても現代（あるいは中世以降）と同様に口語では「ひっさぐ」という促音便が用いられていたが、文字表記するにあたって促音「っ」が表記できないため「ひさぐ」と書かざるを得なかったと解すべきであろう。

ちなみに「ひきこす（引き越す）」は現代語ではもっぱら「ひっこす」と促音便で発音されているが、「時代別国語大辞典 上代編」には「ひきこす」という語が掲載されており（[6]、p. 605）、平安時代以降にも「ひきこす」という語が用いられたようである（[7]、p. 1106）。この場合には「ひきこす」の促音便「ひっこす」が「ひこす」としてではなく、本来の語形「ひきこす」のまま「書き言葉」として使われ続けたものと思われる。

最後に、上代の促音便に関連して重要な例を一つ付け加えておこう。それは万葉集1996番歌の第二句「水左閇而照」である。

10/1996　天の川　水左閇而照　舟泊てて　舟なる人は　妹と見えきや

「水左閇而照」の訓みについては諸説ありいまだ確定していないけれども、本論文の姉妹編において「水さへてる」と訓み、「てる」を「てってる＝照ってる」の促音「っ」が省略された表記だとする新しい解釈を提案した（[8]）。本論文と併せて参照されたい。

3．おわりに

本論文では、これまで定訓のなかった万葉集3223番歌の第二句「日香天之」について、誤字説によらず原文のままで「ひかく空の」と訓み「（落雷が）引っ掻く空の」と解する新しい提案を行った。そして「ひかく」という語は近世以降に促音便として登場する「ひっかく（引っ掻く）」と同じ語であり、万葉時代にも口語では促音便で「ひっかく」と発音されていたが、文字表記の際に促音「っ」が表記できないため「ひっかく」が「ひかく（日香）」と文字表記されたのだろうと結論した。以上のような考え方が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をあおぎたい。

参考文献

[1]「萬葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 224-225、2002年。
[2]「萬葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 388-389、1995年。
[3]「万葉集 原文付全訳注（三）」、中西進、講談社文庫、p. 180、1981年。
[4]「萬葉集注釋 巻第十三」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 10-16、1964年。
[5]「萬葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 334-335、1960年。
[6]「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。
[7]「岩波古語辞典 補訂版」、岩波書店、1990年。
[8] 竹生政資・西晃央、万葉集1996番歌の「水左閇而照」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第14集第1号、pp. 115-123、2009年。